

丹後地域における畿内系と在地系の古墳

岩 松 保

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 畿内系古墳と在地系古墳から見た丹後社会

岩松 保

## 1. はじめに

前方後円墳や円墳、方墳など、同じ形態の古墳が全国で遍く造られている。墳形のみならず、古墳を構成する要素——遺骸を納める施設、遺体に供える副葬品の内容、墳丘を装う外表施設にも同質性が認められる。同一の規範に準じたと推定される古墳がなぜ汎日本的に分布するのか、という問いについては、前方後円墳をはじめとする墳形の種類とその規模によって社会的な身分が表象されていたためと考えられており(西嶋1961)、このような社会の体制は“前方後円墳体制”、“前方後円墳国家”と理解されている。都出比呂志は、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳といった墳形とその古墳の規模の二側面で氏族の格が決められていたと考え、前方後円墳という日本独自の墳墓形態がその頂点に置かれていることから、前方後円墳体制という名称を与えた(都出2005)。広瀬和雄は、「各地域政権の間に、大和政権を中心にした〈もの・人・情報の再分配システム〉が完成し」、「そのシンボルとして、前代からの伝統を強くひいた墳墓祭祀が統合され、(中略)前方後円墳祭祀が創出され」とまとめ、利益共同体としての大和政権に参画した地域首長がメンバーシップの表象として前方後円墳等を築造した政治的共同体を前方後円墳国家と考えた(広瀬2003 pp.166-172)。

さらに都出比呂志は、前方後円墳体制について、「3段築成で葺石をもつもの、2段築成で葺石をもつもの、2段築成で葺石をもたないもの、段築も葺石もないもの」と(都出1992 p31)、4段階の階層性を指摘し、墳丘の高さも規制の対象と考えた。

この小論では、前方後円墳体制、前方後円墳国家という枠組みの中で、京都府北部の丹後地域における古墳を、段築・葺石の有無から在地系の古墳、畿内系の古墳に分けて検討し、古墳時代における地域と中央との関係、地域の中の社会構成を考察する。

## 2. 丹後地域における古墳文化の特色

京都府の北部、日本海に面した地域は丹後地域と呼ばれている。この地域には、日本海側で最大規模の京丹後市網野町の銚子山古墳(全長198m)、同市丹後町神明山古墳(全長190m)など、近畿地方中央部の古墳と較べても遜色のない古墳が築かれている。

ところが、丹後半島は山地が海浜にまで迫っているため、海岸部には狭小な平野しかなく、中小河川の流域にわずかな平野が開けているだけである。実際、網野銚子山古墳や神明山古墳が立地する丘陵の前面には、大規模な古墳を築造するための農業生産力を担保するような平野が認められない。そのため、被葬者の経済的基盤は、海運を中心とした大陸との交易で支えられていたと考えられている(西谷1988、平良1990、山尾1993)。

丹後地域では、大規模な前方後円墳の築造とともに、丘陵尾根上を削り出して、ほとんど盛り土がなされていない古墳が数多く造られている。丘陵尾根上に連ねて造られた小古墳は“座布団古墳”、“段々古墳”と称されている。また、規模がやや大きく、不整形ながらも前方後円墳や円墳、方墳といった古墳も造られている。これらの古墳は段築や葺石がなく、埴輪の樹立がほとんど認められない。このような地山成形により造られた大小の古墳が丹後地域では大多数を占めている。佐藤晃一は、丹後地域では4,800基以上の古墳が確認されているが、段築・葺石・埴輪の外部施設の三要素を満たす古墳は15基程度しかないと紹介している(加悦町1993 p.2)。

丹後地域では、弥生時代前期～中期において京丹後市峰山町七尾遺跡で丘陵上に方形台状墓が造られており、弥生時代中期以降も丘陵上に削り出しを主とした墳墓が造られている。久保哲正は丹後地域における平野の少なさが、尾根上に弥生時代の台状墓を生み出す一因であったと考えた(久保1998)。丹後地域で盛んに造られる、地山を削り出した低墳丘の古墳は、弥生時代からの墓制を引き継ぐ、在地色の強い古墳と捉えることができる。

このように、丹後地域の古墳は畿内色の強い古墳と在地色の強い古墳に分けられる。畿内系の古墳は、盛り土を主体に墳丘が造られているため、段築を有して、高い墳丘を有する。平面形は精美なものとなる。墳丘は埴輪・葺石で飾られており、“見せる”意識が高い古墳と言える。主体部は竪穴式石室や長持型石棺を有し、副葬品も豊富で多様な傾向がある。一方、在地系の古墳の特徴は、地山を削り出して墳丘が成形されており、盛り土は少なく、そのため、墳形は地形に制約されるので平面形は不整形となる。また盛り土が少ないため墳丘は相対的に低く、段築を有さない。葺石は施されないようであるが、埴輪を有するものの絶対数は少なく、副葬品は概して少ない。古墳の墳丘が低く、葺石・埴輪を欠くことから、見せる意識が低い古墳と言える。丹後地域の古墳の大多数がこのタイプであり、弥生墳墓からの伝統を継承する古墳と考えられる。

以上を踏まえ、地山成形や盛り土を指標に、畿内系の古墳と在地系の古墳に分けた上で考察を加えたい。地山成形や盛り土の有無は、正確には発掘調査で確認する必要がある。そこで、現地表からの観察で認識しやすい、段築と葺石の有無を指標とすることで、発掘調査がなされていない古墳も対象にして検討することができる。

### 3. 前方後円墳体制下における丹後の地域社会

#### (1) 畿内系の古墳と在地系の古墳

付表1は丹後地域における前方後円墳、円墳、方墳の墳形別に規模順に並べたときの段築・葺石の有無の一覧にしたものである。『京都府遺跡地図 第3版』を基に作成した。

前方後円墳は50基あまりが記載されており、段築が確認されているのは10基あまりである。墳丘規模1位の銚子山古墳から7位の法王寺古墳まで段築を有した畿内系の古墳である。上位3墳が三段築成で、4位以下は二段築成である。

11位以下の段築のある古墳を見ると、岩ヶ鼻古墳、芦高神社古墳は京丹後市久美浜町にあり、名木山3号墳(京丹後市峰山町)とともに15位前後の規模である。すべて未調査で、岩ヶ鼻古墳は二段築成で(同志社2006)、芦高神社古墳は後円部高4mで、葺石の存在は不明であるが、「墳丘は観察によると大半が黒色の盛り土である」とあり(同志社1973)、盛り土で構築された畿内系の古墳と判断される。名木山3号墳は二段築成と推測されているが、詳細は不明である。作山4号墳は蛭子山古墳に近接して築かれており、段築・葺石を有している(京都府1931)。墳丘規模は30位前後である。三津古墳は京丹後市網野町にあり、詳細は不明である。35位前後。

段築を有さない古墳のうち、奈具岡北1号墳(京丹後市弥栄町)は、やや不整形な平面形態の前方後円墳で(第2図)、後円部径27m、高2.4mを測る。墳丘はすべて地山を削り出して造られている(京埋セ1997)。8位の西谷山1号墳(京丹後市峰山町)は未調査で詳細

付表1 丹後地域の古墳の段築・葺石の有無

( )は規模(m)

順位	前方後円墳	段築	葺石	順位	円 墳	段築	葺石	順位	方 墳	段築	葺石
1	銚子山古墳 (198)	○	○	1	カジヤ古墳 (73)			1	権現山古墳 (50)		
2	神明山古墳 (190)	○	○	2	温江丸山古墳 (65)			2	願興寺5号墳 (45)		○
3	蛭子山古墳 (145)	○	○	3	産土山古墳 (54)	○	○	3	笹ヶ谷1号墳 (45)		
4	黒部銚子山古墳 (105)	○	○	4	鳴谷東1号墳 (54)	○	○	4	離湖古墳 (43.4)		
5	湧田山1号墳 (102)	○		5	温江大塚古墳 (48)		○	5	蛭子山2号墳 (42)	○	
6	白米山古墳 (92)	○	○	6	丸山古墳 (45)	○	○	6	谷垣18号墳 (40)		
7	法王寺古墳 (74)	○	○	7	板浪下1号墳 (44)			7	願興寺4号墳 (35)		○
8	西谷山1号墳 (70)			8	口元連B5号墳 (41)			8	願興寺1号墳 (30)		○
9	奈具岡北1号墳 (60)			9	北谷1号墳 (40)			9	龍淵寺古墳 (30)		○
10	杉谷山7号墳 (60)			10	大明神1号墳 (40)			10	願興寺2号墳 (30)		
11位以下	岩ヶ鼻古墳 (52)	○		11位以下	小銚子山古墳 (36)	○	○	11位以下	セイガイ谷1号墳 (25)		○
	芦高神社古墳 (50)	○			作山1号墳 (36)	○	○		小田屋29号墳 (21.5)	○	
	名木山3号墳 (45.5)	○			宮ノ谷古墳 (35)	○	○		後野円山2号墳 (17)	○	○
	作山4号墳 (30)	○	○		後野円山1号墳 (31)	○	○				
	三津古墳 (26)		○		杉谷山3号墳 (30)	○	○				
				作山2号墳 (28)	○	○					

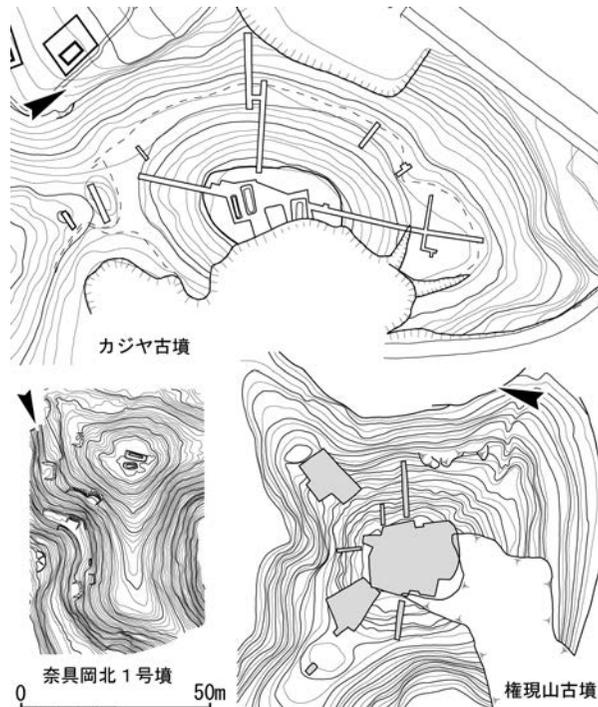


位前後である。

在地系の古墳には、墳丘規模の1位のカジヤ古墳(第2図)がある。京丹後市峰山町杉谷にあり、73m×55mの楕円形の墳丘で、高さ9mを測る。「墳丘は表土下がすぐ地山になっており、盛土をした形跡は認められなかった」とあり、葺石、埴輪などの外表施設も認められない(峰山町1972)。温江丸山古墳<sup>(注1)</sup>は、南北65mのやや細長い円墳で、現地表では段築状の平坦面が認められるが、「墳丘を南北に横断する断面を見ても、うすい表土層の下が直ちに地山になっていて盛土を行った形跡は全く認められない」と述べられており(京都府1961)、後世の改作のため段築状となったのであろう。10位の北谷1号墳(京丹後市久美浜町)は、東西長約36m、南北長約40m、高さ5mの円墳で、地山削り出しにより造り出されている(京埋セ1995)。宮津市波路古墳は直径30mの円墳で、地山を削り出して造られている(宮津市1988)。35位前後。

方墳は2,800基程度が掲載されている。段築が認められるのは、5位の蛭子山2号墳、50位前後の小田屋29号墳(京丹後市峰山町)、80位前後の後野円山2号墳(与謝野町加悦)がある。後野円山2号墳は2段築成、葺石、埴輪を有する(加悦町1981)。願興寺古墳群(京丹後市丹後町)は5基の古墳からなる古墳群で、1・3～5号墳で葺石が認められている。それぞれの古墳には段築は認められないが、4・5号墳では、「墳丘は方形に整えられており、全体的に精美な古墳である」と報告されており(丹後町2002)、盛り土で墳丘が造られているようである。セイガイ谷1号墳(京丹後市久美浜町)は葺石、小田屋29号墳(京丹後市弥栄町)は段築が記載されているが、詳細は不明である。30位前後と45位前後となる。

地山成形の方墳を見ると、権現山古墳は京丹後市久美浜町に所在し、50m×45m、高さ6～7mを測る(第2図)。8～9基の主体部があり、「地山成形で



第2図 丹後地域の在地系の古墳

多埋葬であることは、弥生時代後期の伝統が強く残っていることを示すのか」と評価されている(京丹後市2010)。

笹ヶ谷1号墳(京丹後市峰山町)は45m×36mで(京都府1998)、離湖古墳(京丹後市網野町)は43.4m×34m、高さ6.35mの墳丘が推定されている(網野町1993)。谷垣18号墳(京丹後市久美浜町)は、長径約40m、短径約30mの方形の墳丘を有している(久美浜町1998)。これらの古墳は、葺石、段築は認められず、自然地形を利用した地山成形で、盛り土はなされていない。

これらの古墳の細かな時期は研究者により異同がある。以下、平良泰久の説(1990)を基に概観すると、4世紀中葉に白米山古墳<sup>(注2)</sup>、4世紀後葉に蛭子山古墳、温江丸山古墳、波路古墳、カジヤ古墳、権現山古墳、北谷1号墳、4世紀末～5世紀初頭に神明山古墳、銚子山古墳、法王寺古墳、5世紀前半に産土山古墳、黒部銚子山古墳、湧田山古墳、離湖古墳、5世紀中葉に鳴谷東1号墳、奈具岡北1号墳、ニゴレ古墳となる。

おおむね、4世紀後葉から5世紀中葉までのものと考えられる。古墳の分析には、細かな時期を設定し、時期と時期の間の変遷を論じるべきであろう。しかし、在地系の古墳は出土遺物が少なく時期が明確にわかるものは少なく、しかも未調査の古墳が多く、結果、小時期に分けると各時期の標本数が少なくなる。上述の古墳は前期末から中期中葉にかけての1世紀弱、3～4世代のタイムスパンがあることを承知の上、以下の検討を加えたい。

## (2) 地域首長と中央の関係

丹後地域における前方後円墳、円墳、方墳について、規模別に段築、葺石の有無を概観したが、それぞれの墳形において、上位の規模を占める古墳は段築、葺石を有した畿内系の古墳が多い。特に首長の墳墓と判断される前方後円墳では、畿内系の古墳が1～7位までを独占している。細かく見ると、前方後円墳は50数基中12基が畿内系の古墳で、35位前後の三津古墳が最小のものである。円墳は約3,600基中10基程度が畿内系の古墳で、作山2号墳の60位前後が最小のものである。方墳も2,800基あまりのうち10基程度が畿内系の古墳で、最小のものは後野円山2号墳の80位前後となる。円墳、方墳は10m程度の規模を有する小古墳がほとんどであるが、それを差し引いて考慮すると、それぞれの墳形において、畿内系の古墳は絶対的に規模が大きいとまでは言えないにしても、比較的大きな規模で造られる傾向にあると言えよう。

古墳時代の社会が前方後円墳体制という社会であったのだから、前方後円墳をはじめとする墳形や規模、棺の形や葬送アイテムは、特段の理由がなければ各々の首長が自由に選択することは不可能であり、その体制に参与している首長層の間の格や職務、首長間の関係性に応じた規準や制約があり、それに従わざるを得なかったと考えられる。このことか

ら、古墳時代前期末～中期中葉にかけて、畿内系の古墳が盛んに造られている時期において、丹後の首長及びそれに次ぐクラスが畿内系の古墳を造ることが許されており、同時に、造る必要があったと言える。

そうすると、共通の祭式に従って身分に応じた墳墓を造ることが前方後円墳体制のメンバーの要件であるのだから、畿内の首長と同じ様式の前背古墳——背が高く表面を石や埴輪で飾った見栄えのよい古墳を丹後地域の首長が造ったということは、丹後地域の一部の首長と畿内の首長層とが極めて同質、同格であったということを示唆しているのだろう。丹後地域において畿内系の古墳に葬られた首長は、畿内の首長層と同質の古墳を造ったがゆえに、在地系の古墳の被葬者と較べて畿内の首長層とより近い存在であり、特別な関係を有していたと考えられる。この関係は、社会体制に基づく関係なのだから、首長間の友誼といった個人的な関係に求めるべきではないだろう。在地系の古墳の被葬者も、古墳を造り古墳祭式を行うことで、前方後円墳体制に参加しているが、それは在地系の古墳を造ることで参加しているのであって、畿内の首長層と同質の古墳を造るような特別な関係を有しているのではない。

広瀬和雄は、大前方後円墳と小方墳の被葬者の関係について、「大和政権は丹後首長層の代表たる大首長——大・中型前方後円墳——や、そのほかのいくつかの地域首長——小型前方後円墳——をみずからの政治秩序にとりこみながらも、まだ丹後全域の首長を直接掌握するにはいたっていない」と考えた(広瀬2007 p.233)。筆者も広瀬の考えにほぼ同意するものである。

高塚を盛り上げて造り、墳丘のテラスには埴輪を立て、墳丘の表面を葺石で飾った畿内系の古墳は、前方後円墳体制における墳墓ブランドの中でも上位に位置付けられ、それを造れない人々の羨望の眼差しを集めるものであっただろう。いわば、“畿内ブランド”とも言えるであろう。佐藤晃一は、加悦町古墳公園の整備に際して、段築・埴輪・葺石を有する古墳の整備には、それらを有さない古墳と較べて約20倍の工事費がかかったと述べており(加悦町1993 p.82)、当時の首長にとってもかなりの経済的な負担を強いられたことは間違いない。しかし一方で、畿内首長層との親縁さや経済的な裕福さを示すことで、他の首長に対して優位な立場を保持し、有形・無形の恩恵を得ていたことも間違いないであろう。

地方において、畿内と同質の古墳を造ることは、前方後円墳体制の一員として中央政権に積極的に関わっているという証であり、しかも過剰な古墳をも造り得るという経済力を示すことで、地域社会から抜きんでて中央の首長たちと親密な繋がりを有した“名士”というステータスを獲得していたのであろう。その見返りとして、中央と地方の間でやり取り

される物品や情報を一括して取り扱う窓口であり、地方と中央を繋ぐ役割を果たしていたのではないだろうか。

歴史的にはどういった関係であったと考えられるのであろうか。

畿内系の古墳が畿内に多く分布しているのは、“畿内の首長層は大和の中央政権に地理的・歴史的に深く関わっていたので畿内ブランドの古墳を造ったため”であるのならば、丹後地域で畿内系の古墳を造った首長もまた、中央政権に深く関わっていたためと考えられるのではないだろうか。

文献史学では、古代の政治支配の根幹に部民制があると考えられている。王権や豪族が部を領有し、職掌に応じて人的・物的貢納を義務化して諸役を奉仕させるものである。鎌田元一によると、部民制は「トモ」制から発展したもので、①5世紀頃に畿内およびその周辺の中小豪族を大王のもとに「トモ」として組織され、宮廷の各種の職務を世襲的に分掌させ、②5世紀後半にその組織を拡大・発展させて「トモノミヤツコ」が「トモ」を率いるという体制に整備され、③帰化人を取り込んで伴造-部品制へと発展し、部称が成立して部民制が確立していった、と考えられている(鎌田2001 p.92)。

早い段階から畿内の中小首長層は大和を中心とした中央政権の中で「トモ」として深く関わっていたため畿内系の古墳が畿内に多く造られた、と考えられるのならば、丹後地域で畿内系の古墳を造った首長もまた、中央政権の中で「トモ」として深く関わっていたためと考えられるのではないだろうか。

吉村武彦は、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘の杖刀人首と熊本県江田船山古墳大刀銘の典曹人はそれぞれの地域から上番して倭国王に「仕え奉る」という関係を結んでいたと考えられることから、5世紀代には「おそらく各地の在地首長が、大和政権と仕奉関係を結ん

で」出仕していたと考えた(吉村1993

付表2 丹後型埴輪一覧(太字は畿内系の古墳)

No.	名称	墳形	規模	使用形態
1	網野銚子山古墳	前方後円墳	198 m	樹立
2	神明山古墳	前方後円墳	190 m	樹立
3	蛭子山古墳	前方後円墳	145 m	樹立
4	法王寺古墳	前方後円墳	74 m	埴輪棺
5	小銚子古墳	円墳	36 m	樹立
6	作山1号墳	造出付円墳	36 m	樹立
7	作山2号墳	円墳	28 m	樹立・埴輪棺
8	作山3号墳	方墳	17 m	樹立
9	温江百合3号墳	方墳	10 m	埴輪棺
10	鳴谷東3号墳	方墳	10 m	樹立
11	大將軍遺跡			

pp.202-205)。仕奉関係を有した丹後の

首長層が、その親密さゆえに丹後地域で畿内系の古墳を造ったのではないだろうか。

畿内系の古墳の造営を古代における中央と地方の仕奉関係に結びつける根拠は全くない。しかし、古代史における4～5世紀は古墳時代前期から中期に当たるのだから、一つの考え方として提示し得るのではないだろうか。

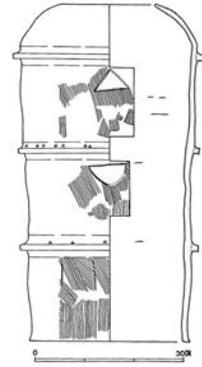
## (3) 地域の中の社会関係

丹後地方には、丹後型埴輪と呼ばれる特徴的な埴輪が分布している。朝顔形埴輪の朝顔部分を取り外したような器形をなしている(第3図)。丹後型埴輪が出土している古墳・遺跡は、現在までに11か所が確認されており(付表2)、その分布は第4図となる。

この表を見ると、網野銚子山古墳、神明山古墳、蛭子山古墳といった、上位三位までの前方後円墳に丹後型埴輪が樹立されている。これらの古墳には丹後地域の首長が葬られていると考えられるため、丹後地域の首長は、“埴輪で古墳を飾る”という畿内の古墳祭祀を継承しつつも、主体的に丹後型埴輪のデザインを制作し、自らの墳墓に樹立させたと言える。丹後型埴輪の制作に首長が主体的に関わったと考えられることから、その生産や配布先の選定にも主体的に関わっていたことは推測に難くない。

これらの首長の古墳が在地系の古墳ではなく、畿内系の古墳である点は重要である。先にも見たように、畿内系の古墳を造った丹後の首長は、畿内の首長層と密接な関係を有していたために、畿内ブランドの古墳を築造した。しかし一方で、丹後の首長は、丹後型埴輪という丹後地域独自の埴輪を制作・使用したという点で、畿内に住まう首長層とは一線を画した存在であったと言える。また、古墳の基数はわずかであるが、丹後半島のほぼ全域に丹後型埴輪が配布されている点で、丹後の広い範囲の中小首長層を取り込んでいたと考えられる。こういった点で、丹後のトップクラスの前方後円墳に葬られた被葬者は、中央から地方に派遣された国造や征討將軍といった人物とは考えにくい。丹後地域を出自とする首長であったと言えよう。

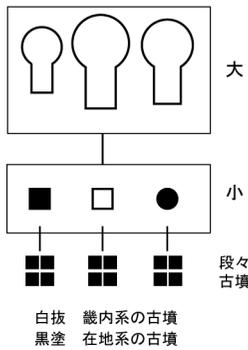
さて、丹後型埴輪が樹立されている古墳は、必ずしもトップクラスの規模の古墳に限られているわけではない。網野銚子山古墳から法王寺古墳の



第3図 丹後型埴輪  
蛭子山古墳出土 加悦町  
はにわ資料館1993



第4図 丹後型埴輪の分布と交通路



第5図 大小古墳関係

4基の大規模古墳と小銚子古墳以下の6基の小規模古墳に分けられる。丹後型埴輪は、規模の上位の前方後円墳だけに用いられたアイテムではなく、小規模な円墳や方墳にも配置されている。その選定には何らかの意図があったことが視られる。

丹後型埴輪は、網野銚子山古墳、神明山古墳、蛭子山古墳といった、トップ3の前方後円墳に用いられていることから、丹後の首長が独占的に使用したアイテムであったことは間違いな

い。そうすると、丹後型埴輪を有する小規模な円墳・方墳の被葬者は、中規模古墳の被葬者を介することなく、丹後の首長と直接的な関係を有した、極めて近い人物であったと言える。逆に見ると、畿内系、在地系に関わらず、大きな前方後円墳や円墳であったとしても、丹後型埴輪が供給されていないという点で、網野銚子山古墳などの丹後型埴輪を使用した被葬者達とは一線を画した、やや疎遠な関係であったと推測される。

このような大小古墳の在り方に地域の首長クラスの関係性が反映しているとするならば、大首長のグループと小首長のグループは、その中間の規模の古墳の被葬者を介することなく、直接的な関係を結んでいたと言える(第5図)。そして、こういった小首長であっても小銚子古墳は円墳の15位前後、作山1, 2号墳がそれぞれ円墳の15位前後、60位前後の規模を有していることから、かなり上位に位置した首長であったと判断できる。おそらくこういった首長の下に段々古墳に葬られた多数の被葬者が従っていたのであろう。

丹後型埴輪で古墳を飾った大首長と小首長の数がほぼ同数であることを重視すると、大規模古墳1基に対して1~2基の小規模古墳が関与していたと考えられる。この内容は、4世紀中葉から5世紀中葉の1世紀強、3~4世代のタイムスパンであることを考慮すると、1世代あたりに1組の大小古墳のセット関係があったものと推測される。

丹後地域にあっても、小地域ごとに小首長がおり、その上位に中首長、最上位に大首長がいるような、入れ子構造をなした関係があったことは間違いなからう。そういった関係性の中に、第5図で示したような大首長と小首長を直接的に結ぶ関係が隠れているのである。

この関係は、丹後型埴輪の分布の中で見られることから、丹後型埴輪の生産・配布に関するものであったであろう。丹後型埴輪を制作し、樹立させることを発案した大首長とそれを実際に生産・配布する職務を与えられた小首長が想定される。大小古墳がダイレクトに結びつく関係性は、丹後地域における大首長が「トモ」的なものとして中小豪族を把握していたことを反映しているのではないだろうか。

#### 4. 古墳分布と領域支配

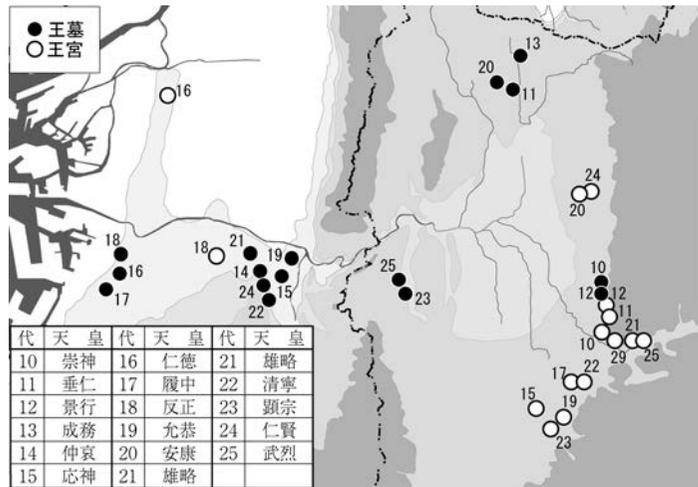
ある地域で大規模な前方後円墳が築かれて、時代とともにその場所が移っていく場合、首長権が他の豪族に移ったと理解されている。これは、前方後円墳が造られた近傍には有力な首長が存在したと考えられており、“墳墓は居住地に近い場所に造られる”と暗黙的に捉えられているからである。

吉村武彦は『記紀』に記された第10代崇神天皇から第25代武烈天皇までの王宮と王墓を一覧し、王宮と王墓の位置が近接していないことから、「古墳の所在地に政治的基盤を求める従来の視点は再検討すべきである」と述べ、逆に、王宮を政治的拠点と捉えるべきと考えた。そして、「大和王権は、その首長が特定の政治的地盤から離れることによって成立したのではあるまいか」と、一定の領域支配が実現していた可能性を示唆している(吉村1993 pp.185-186)。

第6図は、吉村の作成した「王宮と王墓の所在地」(p.186 表1)に基づいて、図示したものである。<sup>(注3)</sup> 第13・14代の王宮は図外に位置する。

歴代の王宮は大和盆地の南東部に集中しているのに対して、王墓は大和盆地の周辺と河内・和泉の丘陵地に広く分布している。第12代の景行は王宮と王墓が近接しているが、基本的に王宮と王墓は近接していない。『記紀』の記載が事実を伝えているとすると、少なくとも天皇については住まいの近くに彼の奥津城が造られたとは言えないのである。このことを敷衍すると、古墳時代においては、前方後円墳をはじめとする墳墓は身分やメンバーシップを表象するための、極めて政治的な造作物であるのだから、その占地は居住地の近くではなく、政治的な意図を有して住居とは別の地域に造られる場合があったと捉える必要があるだろう。

首長クラスの墳墓の占地について、考古学の立場から具体的な見解を述べたのは広瀬和雄である。広瀬は、「広義の大和川水系に営まれた畿内5大古墳群(引用者注;佐紀、大和・柳本、馬見、古市、百舌鳥古墳群)は、〈巨大古



第6図 大和・河内地域の王宮と王墓

墳の環大和政権配置〉というべき政治効果を生むべく、大和政権の政治意志にしたがって設置された観念的な装置であった」と評価した(広瀬2009 p.75)。

4世紀代に大和に大首長墳が築造され、5世紀代には河内地域に大首長墳の築造場所が移動したことについて、大和から河内に政権中枢が移行したと説明されている。この説明に対し広瀬は、5世紀代に河内地域に古市・百舌鳥古墳群が造られている間にあっても大和盆地北部では佐紀古墳群、西部では馬見古墳群で大前方後円墳が造られている、と政権移動に疑義を呈した。そして、畿内の5つの大古墳群をはじめとして、複数の首長系譜の古墳群が1か所に集まっている古墳群の“群”が全国的に形成されていることを指摘し、「そこに結集した首長たちの政治的結合の強さや親縁性を内外に見せ」るためであり、その背景には個々の首長が統括する領域が集まって首長層の領域が形成されていた、と考えた。そして、周辺に可耕地となる平野が認められない場所に大きな古墳が造られる場合があることも、首長層の領域内で、より効果的な場所が選地されたためと説明した(pp.71-75)。

彼の主張は、古墳の占地の政治性を等閑視してきた古墳時代研究に新たな視点を提供するものとして重要である。彼の考えを承けることで、辺鄙な場所に立地する個別の古墳をその地域社会に位置づけ、古墳の配置から首長層の領域を復元することが可能となる。

丹後地域の古墳分布を見ると、丹後地域の特徴として中小河川の流域に狭小な平野が分布しており、大平野がないゆえに古墳の配置を単純化して理解できる。

丹後半島の内部の交通を見ると、①海浜に沿って海上を往来する、②海浜から中小河川に沿って山間をさかのぼり、峠を越えて中小河川に沿って下る、という経路しか取りようがない(第4図破線部分)。そうすると、福田川、竹野川、野田川の河口に、銚子山古墳、神明山古墳、法王寺古墳という大前方後円墳が立地しているが、この位置は海上交通から丹後半島の中央に入るため、陸路に切り替える場所にあたる。それぞれの河川沿いに歩を進めると、その道沿いには大小の古墳が累々と築かれており、最終的に野田川中流域に達して蛭子山古墳に至る。まさに他者に見せるための古墳配置と言うべきものである。

広瀬は、畿内の5大古墳群の配置について、百舌鳥、古市、馬見古墳群は大和から和泉に至るルート上にあり、佐紀古墳群は山背に、柳本古墳群は伊勢に通じる入り口にあり、前方後円墳をはじめとする古墳の配置は、交通路上に位置しており、政治拠点の僻邪、示威、集積による増幅を意図して、計画的に配置されたと述べている(広瀬2007 pp.154-156)。丹後地域の古墳の配置もまた、そのような意図があったのであろう。

先に見たように、丹後型埴輪は丹後地域に限定されたアイテムであり、しかも丹後地域の大規模な前方後円墳に用いられていることから、丹後ブランドとも言える一級のアイテ

ムであり、他者と自己を峻別するための重要なアイテムであったと推測される。中小河川の河口——陸路の入り口に丹後ブランドで飾った見栄えの良い畿内系の大前方後円墳をディスプレイし、他者に対して視覚的に圧倒しようとしたのであろう。このように類推すると、丹後型埴輪は丹後首長の大古墳と同じく、関係性の強い範囲に意図的に配置されたものと考えられる。それゆえ丹後の地域社会における首長層が“結集”した領域を示していたと捉えられるのである。そして、海浜からのルートが到達する地点、蛭子山古墳を中心とした加悦谷こそが、丹後地域の首長層を束ねる大首長の住まう場所であったと言えるであろう。

## 5. おわりに

筆者は、平成19年度に京丹後市弥栄町谷奥古墳群の発掘調査に携わった。谷奥古墳群は10数基の古墳からなり、調査により、8号墳では4.1m×10.4m、深さ1.2mの墓壇内に長さ7.3m、幅0.75mの長大な割竹形木棺の痕跡が認められたが、鉄鏃8、鉄剣1、ヤリガンナ1、墳丘上で家形埴輪の破片を検出したただけであった(京埋セ2008)。谷奥古墳群の北西約750mにはニゴレ古墳があり、短甲・衝角付冑・鉄製武器などの副葬品のほか、円筒埴輪や甲冑形・船形・椅子形・家形などの形象埴輪が出土しており、当時、副葬品の多寡の意味、墳丘になぜ盛り土がないのか、埴輪の有無の違いは、など疑問に思ったところである。

その調査から10数年を経て、当時の疑問の一端を明らかにするために丹後地域の古墳社会に検討を加えたのがこの小論である。

畿内系の古墳が丹後地域で造られたり、丹後地域で大古墳と小古墳で丹後型埴輪を共有したりするのは、古代史で言うところの「トモノミヤツコ」、「トモ」的な関係が、中央の首長と丹後の首長間で取り結ばれ、そして丹後地域の首長層の中でも取り結ばれたためと考えた。

古代史と考古学が共通のテーマで古墳時代の歴史を語るためには、さらに研究を進める必要がある。

(いわまつ・たもつ＝当調査研究センター調査課総括主査)

注1 加悦町報告書(1992、1993)では段築の古墳と評価している。

注2 平良は4世紀末～5世紀初頭としているが、加悦町1998の調査成果により修正した。

注3 宮都の比定地は、『古事記 日本思想体系』岩波書店1982の校注・補注を参照した。

### 参考文献

網野町教育委員会 1993『京都府網野町文化財調査報告』第7集

大宮町教育委員会 1987『大宮町文化財調査報告』第4集

- 鎌田元一 2001「付論 部民制の構造と展開」『律令公民制の研究』塙書房
- 加悦町教育委員会 1981『加悦町文化財調査報告書』第4集
- 加悦町教育委員会 1987『加悦町文化財調査報告書』第6集
- 加悦町教育委員会 1992『加悦町文化財調査報告書』第15集
- 加悦町教育委員会 1992『加悦町古墳 加悦町文化財調査報告書』第16集
- 加悦町教育委員会 1993『第1回加悦町古墳シンポジウム 蛭子山古墳の時代』
- 加悦町教育委員会 1998『加悦町文化財調査報告書』第26集
- 加悦町古墳公園はにわ資料館 1993『加悦町古墳公園はにわ資料館研究報告』第1集
- 京丹後市 2010『京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料』
- 京都府 1931『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12冊
- 京都府 1940『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第20冊
- 京都府教育委員会 1955『京都府文化財調査報告』第21冊
- 京都府教育委員会 1961『京都府文化財調査報告』第22冊
- 京都府教育委員会 1998『埋蔵文化財発掘調査概報 1998』
- 京都府教育委員会 2001『京都府遺跡地図 第3版』第1分冊 丹後
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995『京都府遺跡調査概報』第65冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査概報』第76冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008『京都府遺跡調査報告集』第128冊
- 久保哲正 1988「丹後地域における弥生墓の展開」『考古学と技術 同志社大学考古学シリーズ』Ⅳ  
同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 久美浜町教育委員会 1998『京都府久美浜町文化財調査報告』第20集
- 平良泰久 1990「京都北部」『古墳時代の研究』第10巻 雄山閣
- 丹後町教育委員会 2002『京都府丹後町文化財調査報告』第15集
- 都出比呂志 1992「墳丘の型式」『古墳時代の研究』第7巻 雄山閣
- 都出比呂志 2005『前方後円墳と社会』塙書房
- 同志社大学考古学研究室 1973『同志社考古』10
- 同志社大学考古学研究室 2006『同志社考古』12
- 西谷真治 1988『ニゴレ古墳』(京都府弥栄町文化財調査報告第5集) 弥栄町教育委員会
- 西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学』10 (『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会  
1983再録)
- 広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川選書 355 角川書店
- 広瀬和雄 2007『古墳時代政治構造の研究』塙書房
- 広瀬和雄 2009「古墳時代像再構築のための考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集
- 峰山町教育委員会 1972『カジヤ古墳発掘調査報告書』
- 宮津市教育委員会 1988『波路古墳・波路城跡・荒神社跡』(宮津市文化財調査報告第16集)
- 山尾幸久 1993「古代史から観た世紀の丹後とヤマト」『第1回加悦町古墳シンポジウム 蛭子山古  
墳の時代』加悦町教育委員会
- 吉村武彦 1993「倭国と大和王権」『岩波講座 日本通史 古代1』第2巻
- 立命館大学文学部 1989『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第2冊